

「美しい術」

(第五十九回)

東京青山にある美術館に立ち寄り、「岡倉天心展」を十分に楽しんだ。縁りの品々の展示に加え、日本文化と世界戦略についての講演会が10数回もある。天心が美術史の大御所であるのは知っていたが、歴史的な業績に触れて驚嘆してしまった。

天心は7歳から英語を習い、13歳で東京開成学校(現東京大学)の一期生に。当時、初めての大学卒業生は学士様と呼ばれるトップエリートで、わずかに18歳で文部省の中樞幹部となった。漢詩や文学、芸術に精通していた天心は、音楽取調掛、図画取調掛を務め、28歳で東京美術学校長まで昇りつめる。

その後、日本美術院の設立やインド巡礼を行い、米国ボストン美術館の常勤として活躍。代表

健康のススメ 板東 浩

的な名著が「THE BOOK OF TEA(茶の本)」である。本書を読むと、日本文化の独自性や素晴らしさが詩情豊かに語られ、人間と自然の調和が説かれ、我々が今後進むべき方向性を示唆しているかのようだ。

私が思うに、天心はハイブリッドの天才でないかと思う。生まれと育ちは我が国で遺伝的素質は日本人、良い師匠により芸術の才能が伸ばされたヨーロッパ人、四書五經に精通し東洋思想に精通した中国人、大脳の言語中枢と国際的感覚はアメリカ人、と言えないだろうか。

一つ興味あるエピソードを紹介しよう。「美術」という語を名付けたのは、天心であると。それも、英語の fine art に対する適切な日本語を思いついたのが、友人らと牛鍋屋で食事しているときだそう。

(医学博士・内科医師)